



Enterprise Architect 15.2 feature guide

---

*by SparxSystems Japan*

**Enterprise Architect 15.2 機能ガイド**

(2020/09/02 最終更新)



このドキュメントでは、Enterprise Architect 15.2 で追加・改善される主な機能についてご紹介します。なお、利用できるエディションが限られる機能もあります。ご注意ください。

## 新機能の概要

バージョン 15.2 での改善点は、MATLAB Simulink などいくつかのツールとの連携と、複数人数で設計をする場合の支援機能を強化した点が中心となります。そのほか、モデルの表現力を強化することのできるチャート機能の強化などが含まれます。

## MATLAB Simulink などのツールとの連携

Enterprise Architect が従来から持つ SysML と OpenModelica を連携してシミュレーションを実行する機能を拡張し、GNU Octave や MATLAB Simulink/Simscape/Stateflow と連携してシミュレーションを実行できるようになりました。

このシミュレーション機能では、Enterprise Architect の SysML モデルから内部で Simulink 等のモデルを生成し、Simulink などでシミュレーションを実行して結果を表示します。そのため、Enterprise Architect の SysML モデル側にシミュレーションに必要な情報を設定する必要があります。また、シミュレーションに関連して、OMG が定義する仕様「SysML Extension for Physical Interaction and Signal Flow Simulation」(SysPhs)に対応したモデルを作成することが可能になりました。

この機能を流用し、シミュレーションを実行せずに SysML のモデルから Simulink や Stateflow のモデル (拡張子.slx のファイル)を生成することも可能です。Enterprise Architect の SysML で概要を記載し、その内容を元に詳細を Simulink や Stateflow で記述する場合に便利です。

なお、弊社(スパークシステムズ ジャパン)で動作確認に利用している Simulink のバージョンは、R2019b です。この機能を利用するためには、ユニファイド版あるいはアルティメット版が必要です。

この機能の概要を紹介する動画を、バージョン 15.2 の紹介ページにて公開しています。

<https://www.sparxsystems.jp/products/EA/ea152.htm>

## 複数人数で設計する場合の支援機能の強化

全世界的なりもネットワークの広がりを受けて、Pro クラウドサーバを利用した分散設計が広がっています。Enterprise Architect では、こうした環境での利用を支援するための機能をいくつか強化・追加しました。

## レビュー機能の強化

既に、複数の要素やダイアグラムを対象に「レビュー」を定義し、関係者がレビューコメントを寄せることが

できる「レビュー機能」を提供しています。バージョン 15.2 ではこの機能を強化しました。

1つは、レビューが終了した後にレビューにコメントを追記・編集できなくする「ロック」の機能を追加しました。レビュー完了後に内容が追加・編集されても気づくことができませんので、そうした事態を防ぐことができます。

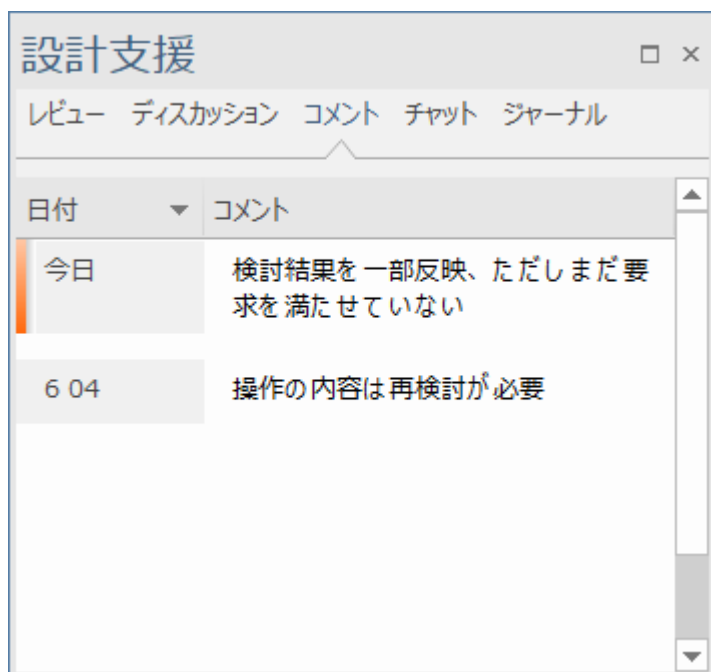
もう1つは、レビューを管理するウィンドウの表示内容や機能を見直し、実施中のレビューとそれぞれのレビューの状況をより分かりやすく表示できるようになりました。

## コメント機能の追加

それぞれの要素に対して「コメント」を追記できる機能を追加しました。他の要素の使い分けの想定は以下の通りです。

- 要素などの「ノート」：いわゆる仕様に含まれる内容。仕様書(ドキュメント)として生成する対象。
- 「レビュー」・「ディスカッション」：チーム内での公式な仕様に関するやりとり。内容自体は仕様に反映される場合もあるが、仕様書には含まれない。議論の内容は削除せず残す。
- 「コメント」：設計者のメモのような位置づけ。不要になったら削除する。

コメントは、以下のように日付とセットで表示されます。



## モデルを探索するためのサブウィンドウの追加・強化

モデル内容を探索し必要な情報を把握・発見するためにいくつかのサブウィンドウを見直しました。

## 要素ブラウザ

バージョン 15.1 ではモデルブラウザ内の 1 つのタブとして利用できましたが、モデルブラウザとは別に独立した機能として利用したいという声が多く、再度サブウィンドウになりました。また、従来のトレーサビリティサブウィンドウは要素ブラウザのタブの 1 つになりました。

要素ブラウザサブウィンドウは、モデルブラウザ内やダイアグラム内で選択した要素についてのさまざまな情報をまとめて表示します。保守項目やプロジェクト管理に関する項目などは、ドラッグ&ドロップで他の要素に移動することができます。

## フォーカスサブウィンドウ

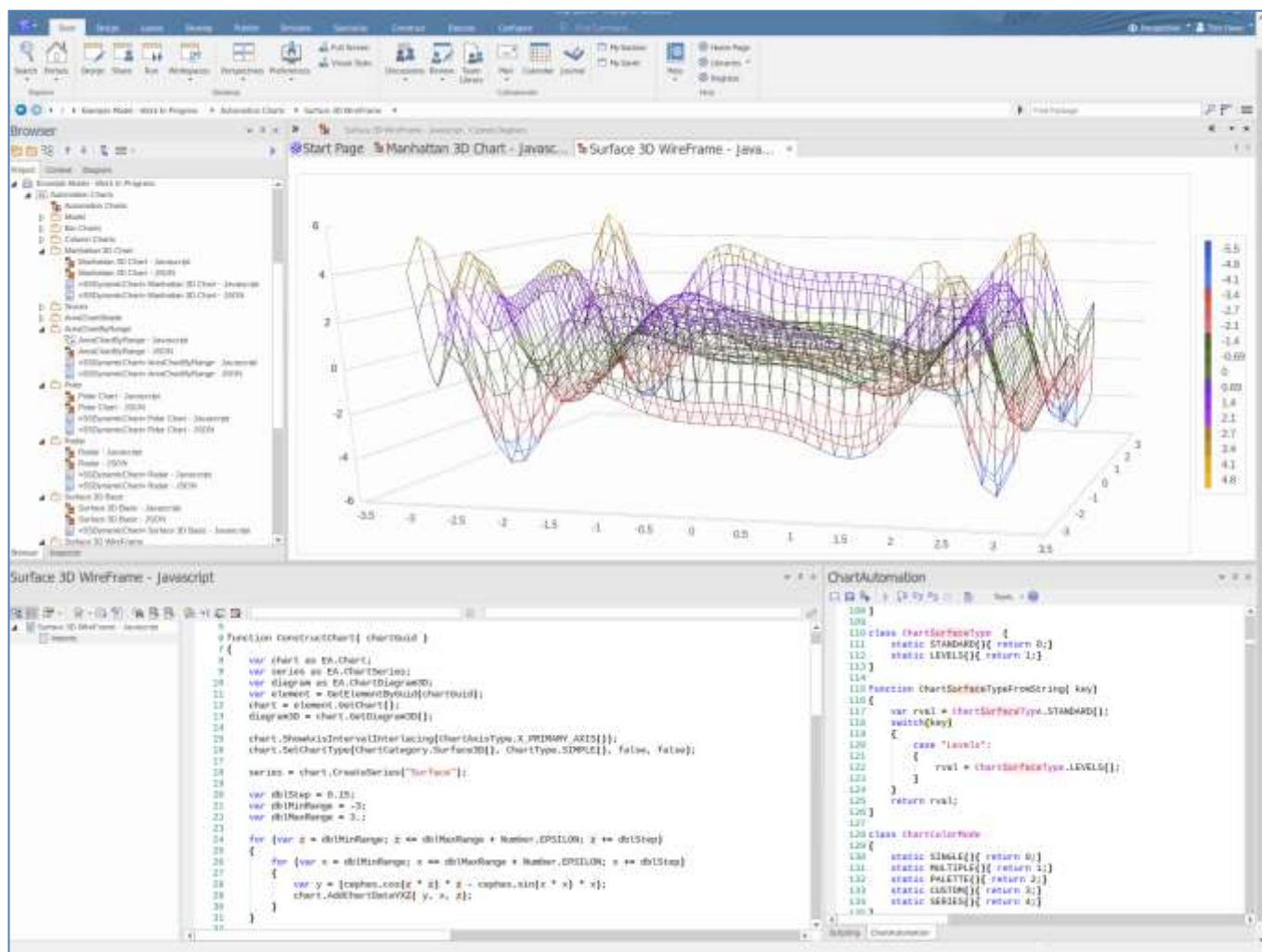
フォーカスサブウィンドウには、モデル内の要素を探索・発見するために便利な機能をまとめました。以下のタブがあります。

- モデルのビュー: 以前のバージョンの「ビューブラウザ」が移動しました。検索ルールなど何らかの条件に該当する要素やダイアグラムをモデルブラウザ内の構成とは関係なく、まとめて表示できます。また、更新検索パッケージ内には、検索ルールのうち、指定した日数以内に更新された要素やダイアグラムなどを発見するルールのみをまとめました。検索を簡単に実行できます。
- ワークセット: 以前のバージョンまでは単独のダイアログでしたが、タブの 1 つとして利用できるようになりました。
- クイック検索: 指定した文字列を含む要素やダイアグラムを簡単に検索できます。
- 最近利用: 最近利用したダイアグラムやファイルなどの履歴です。履歴からダイアグラムやファイルを開くことができます。

## チャート機能の強化

Enterprise Architect ではチャート要素として、さまざまな情報を円グラフ・棒グラフなどで表現する機能がありました。このチャート要素は、事前に指定した内容(モデル内の要素に関する情報や、固定の数値列)を元にチャートの内容を作成できます。

この機能をさらに強化し、JavaScript でチャートの内容を定義できるようになりました。これにより、例えば JavaScript で外部の情報を取得し、その結果を表示するなどの動的なチャートの作成が可能になりました。



チャートの内容は、配置されているダイアグラムを開いた際に結びつくスクリプトを実行して情報を取得、結果を表示します。

## その他の主な変更・改善

- Google Cloud Platform(GCP) および Amazon Web Service (AWS)のアイコンを最新の内容に更新しました。また、Microsoft Azure のアイコンも利用可能になりました。  
(いずれもコーポレート版以上のエディションで利用可能)
- DMN 1.2 で定義されているクロス表形式に対応しました。
- DMN 1.2 のデシジョンテーブルの編集操作をいくつかの点で改善しました。
- ノート・テキスト・サブジェクト(境界)要素について、ダイアグラム間でコピーした場合に、シーケンス図のライフラインなどと同様に常に複製を作成し配置するように動作を変更しました。
- ダイアグラムレイヤーの要素の指定・適用の操作を改善しました。
- C# 8.0 で定義されているいくつかの文法の読み込みに対応しました。
- C++11 で定義されているいくつかの文法の読み込みに対応しました。
- パッケージ・要素・ダイアグラムのディスカッションの内容が、XMI 入出力機能で入出力できるようになりました。

## Enterprise Architect 15.2 機能ガイド

- ・ さまざまな機能から利用されるコードエディタ(スクリプトエディタ)の動作を見直しました。
- ・ バージョン管理機能の「チェックイン」のコマンド(機能)の名称・表示を、より広く利用されている単語「コミット」に変更しました。
- ・ FTA(フォルトツリー解析)のアドインで、アタックツリー(ATA)も作成できるようになりました。概要は、 <https://www.sparxsystems.jp/products/EA/tech/ATA.htm> をご覧ください。
- ・ SysML アドインに関するいくつかのバグを修正しました。